

柳田国男と中国

——1920年代以前を中心に——

Yanagita Kunio and China before the 1920s

王京

WANG Jing

要 旨

従来の柳田研究では日本にとって最大の他者であった「中国」との関連が不明である。本稿は1920年代以前の状況を中心に柳田国男と中国の関係を整理し、考察する。

儒医の家庭に生まれた柳田は人一倍優れた漢文力の持ち主であった。幼少期では漢文によって勉強、表現の基礎が出来ただけでなく、知識、観念や思考法なども漢文の読書を通して形成していた。

明治末期、柳田の関心は文学から学問へと変わりつつあった。『遠野物語』を執筆する発想やその書き方には、文章、学問、使命感が一体となっている『閱微草堂筆記』の影響が大きかった。そして『石神問答』で日本の民間信仰の道教影響論を展開したことを始め、1910年代で伝説、地名、妖怪、信仰などを考察する際、常に中国のことを参照とし、積極的に中国影響論を唱えていた。中国は柳田にとって、対仏教のときの兄弟であり、また西洋に接するときの基礎や参照でもあった。

一方1917年の旅で柳田は現実の中国を初めて経験した。途中で北京などの訪問地を追加して南北を一通り旅したが、中国の広さや南北の相違に驚きながら、混沌して先が見えない現状も目にした。

中国を正しく知ることの重要性、その際、裏にいる大多数の人々について知ることが大事だという理解は、帰国後に主張された「国民外交」の基礎となり、さらに後にヨーロッパ経験を経て「常民の学」としての民俗学の発想に発展する。そして中国経験によって触発された移民、南洋、家船などに対する関心も、人の移動・舟・島と関連して「海的生活史」ともいうべき着想に発展し、沖縄への注目、そして『海上の道』に結実していく。

旅がもたらした中国への連帯感は「日華クラブ」や「海蘭鉄道」などの政治的な行動、そして官界を離れてからも、時局関連の論説文や中国に関わる学問実践などに見られるが、同じ旅で中国への距離感も芽生えたように見受けられ、後の中国影響排除論の一因ともなる。

【キーワード】 柳田国男、中国、漢文、旅行

目 次

- I はじめに
- II 幼少時代と漢文、漢籍
 - 1 勉強、表現の基礎としての漢文
 - 2 知識、観念の形成と漢籍
- III 大正初期までの中国影響
 - 1 怪談への関心と『閱微草堂筆記』
 - 2 日本民間信仰の道教影響論
 - 3 1910年代の論法
 - 4 柳田における仏教、西洋と中国
- IV 1917年の旅とその影響
 - 1 旅行の状況
 - 2 旅行計画の変更と中国印象
 - 3 『支那視察談』にみる「国民外交」観
 - 4 1918年の中国関与
 - 5 移民・舟・島
- V 終わりにかえて

I はじめに

今年(2023年)は柳田国男(1875-1962)没後50周年にあたる。柳田は明治・大正・昭和という激動の時代に88歳の人生を送り、生活に密着した歴史の変化を見据え、民俗学を中心とした幅広い学問分野において膨大な研究を残した。その偉大さに加え、近代化への反省、地域や生活への関心、学問の政治性への注目などの社会・思想状況の動向が合わさり、夥しい数の「柳田研究」が存在しているが、しかしその議論は日本国内に限定されがちである。

柳田と日本以外に関して、欧米については文学から社会科学への理解やジュネーブ滞在の経験など、その関わりや影響が明らかにされており、アジアについては植民地主義や戦争加担責任という文脈で朝鮮、台湾との関連が論じられている。しかし、同時代史の中で一貫して日本にとって最大の他者であった「中国」との関連が不明なままである。

社会一般的にも日本民俗学の内部でも「一国民俗学」の主唱者柳田は中国と没交渉だった、というイメージが強く、まとまった中国観を披瀝する文章はあまり見当たらず、逆に中国起源説を排するような表現が目立っているという印象さえある。しかし、柳田の行動や文章をよく見れば、間違いなくそこに中国はしっかりとあったのである。

拙著『1930、40年代の日本民俗学と中国』(2008年)では、柳田が本格的な学問を目指し始める1920年代から30年代半ばにかけて「一国民俗学」を成立させたプロセスを理論と組織の両面から整理し、その後日中戦争の勃発と長期化の中で増えつつあった中国との関わりが、理論と実践の両面において日本民俗学に変化をもたらしたことを明らかにしている。そこで指導者であった柳田と中国との関連も一部でありながら指摘していた。しかし資料の発掘も分析も十分ではなかった。

88年の長い人生、様々な人や組織との関わり、膨大な著述、そこから柳田国男と中国の関わり全体の像を浮かび上げさせながら、柳田にとっての中国の意味を総合的に考えていくことは簡単な作業ではない。しかしそれによって、柳田学の特徴を違う角度から照射するだけでなく、近代日本の

知識人と中国との関係の一タイプとして理解することもできよう。そのための予備考察として、本稿は前著で取り扱う範囲外であった1920年代以前の状況を中心に、柳田国男と中国の関わりを時系列に①幼少期、②大正初年まで、③1917年の旅、の3つに分けて整理し、それぞれの時期の特徴について考察していくことにする。

II 幼少時代と漢文、漢籍

1 勉強、表現の基礎としての漢文

柳田国男が生まれた松岡家は、祖母小鶴の父松岡左仲の代より医師の家系であった。「儒医両全」、「儒医一本」はかつて江戸社会の通念にもなっていたように¹⁾、小鶴も漢学の素養が深く、寺小屋開いて子供たちに漢籍を教えていた。父松岡操は姫路藩の医師であるが、それより儒者として高名であった。母だけは、それほど学問がなかったが、優れた記憶力の持ち主で「大学とか中庸とかいう四書でも、みな読む三部経の類でも、目では覚えずに何べんも聞いて耳から覚え、頭で覚えている。そしてこちらの部屋で私が素読しているのを聞いて、間違いを直してくれるのが常であった」[柳田 1958:94] という。

明治に入っても、日本の知識人にとって漢文漢籍は必須の教養であったが、柳田は儒医の家庭に生まれた関係で、漢文への親しさが一層強かった。子供ながら祖母が残した漢文集『南望篇』[柳田 1958:29] や父が買って帰った『康熙字典』に感心したり[柳田 1958:77]、父と来客の間の、『大学』の「斐たる君子あり」にかかった棕隠の逸話の洒落がわかったり[柳田 1958:165-166] だけでなく、以下のように文章の事始めも漢文と深い関係がある。

そのころ『昔々春秋』といって大阪の中井履軒が、文章の稽古に支那の『春秋』を真似して、昔話の猿蟹合戦やお伽噺の類を、一々『春秋』のような書き方をして出したものがあった。私はそのこと生意気だったらしく、これを読んで大変感化をうけ、自分も真似して「花鳥春秋」というものを書いたのである。これも明治十八年のころだったと思う。(中略)これが私の文章を作るということの、まず最初の仕事だったのである。[柳田 1958:168]

13歳、柳田が播州を出るとき、父から送別の詩を書くことを勧められ、『詩語碎金』や『幼学詩韻』を手本に漢詩を作って自分で製本した。父が題をつけて表紙と裏の名前を書いたこの『竹馬余事』は初めての著書にあたり、ずっと大事にしていたという。[柳田 1958:167]

また、兄の井上通泰は、同じく柳田が13歳の頃、奇想天外のいたずらをして母に叱られたこと、つまりお目玉を食ったことを記録した『喰眼録』という日記簿があるが、全部漢文で記されていたと回想している。[井上 1972:6]

柳田国男にとって、漢文は勉強や表現の基礎であり、まるで骨や肉のような存在であった。それを理解するためのエピソードは、1909年に急死した甥矢田部雄吉のために書いた碑文である。

家の長女が生まれたばかりのときで、元気で見舞に来てくれたのに、それから一週間もたたぬうちであった。これには私も大変考えさせられた。こんな腹の底から起る人間の悲しみをあらわす方法をもたなければ困るではないか。仏教でもいいが、坊さんのお経はあまりにも客観的すぎる。そう思ったので、私は父の一年祭のときのノリトとは違った碑文として、この悲しみを書いてみた。[柳田 1958:274]

「皆の意見を阻んでも、その悲しみを表現しようとした」この碑文は、1897年父の一年祭のノリトと並んで人生の中で「自然に書かずにいられない」二つの文章であった〔柳田 1958：276〕。碑文は漢文で書き、同じ宮内省勤務という関係で当時宮内大臣秘書官である森槐南に直してもらい、「よく出来た」と自負している。心のなかにある強烈な気持ちを表現し、永遠に固定する手段として選んだのは、漢文であった。

2 知識、観念の形成と漢籍

13歳で出京した柳田は、布川の小川家で「第二乱読時代」を迎えた。

此時読んだ本の中で最興味の多かつたのは虞初新誌で有る、支那の小話集に耽るやうになつたのは此が病付であつた。一時はよく生意気な漢文を作つて見せて、郷里の親父から虞初新誌を読んで居るだらうと当てられた事があつた。五雑俎のやうな随筆も見た、それからひどく古詩韻範に熱中したことがあつた。朝から晩まで黄色な声で暗誦をしたこともある（中略）小説は見ないこと、なつても、真面目な本が馬鹿げたやうに思はれてならぬ。同じ漢書を見ても四書や五経はいやで、老子を読む莊子を読む、勿論会得の出来る筈が無い、唯見たといふことが嬉しいのである。〔柳田 1907b：492-493〕

ここで大事なものは、柳田は優れた漢文力を持ちながら、中国を対象とすべき漢学者ではないことである。中国は研究の対象ではなく、興味の赴くままアクセスすることができる雑学の宝庫であった。そのように身につけたものも、後に学問を進めるようになったときに、また自由に取り出せる資源となったのである。

柳田にとっては「考のもち方、生活の内状を変へる手段はやはり読書より外に無かつた」〔柳田 1907b：494〕。彼はまたそれを意識的に実践していた。例えば議論をするとき「直覚を結論として了つて、多弁に任せて理由を造るといふ」自分の癖に気づいたのであるが、それを改善するために、先輩に勧められた数学の初歩を学ぶ一方、「自分で力めて支那人などの議論の本を読んだ」〔柳田 1907b：494〕という。

漢文読書の経験によって得られた理解は、さらに敷衍されて認識や発想法の基礎となっていく。

1907年、柳田は『文章世界』第2巻3号に「写生と論文」という一文を寄せ、自分の文章観を表明している。

文章は元来、思想を発表する手段である（中略）以前、漢文などを読んでみると、よく文章は気也といふやうな句に出会した（中略）写生文を読んでからは、この意味がよく分つた。文章は気をもつて貫くなど、いふのも、つまりは、作者の気分をもつて文を行ふことで（中略）自分の気をよく養つて、その上は唯だ、見た事、聞いた事、思ふ事、感じたことを、有りの儘にさへ書けばよいのである。〔柳田 1907a：483〕

ここで主張されているのは普段からの「気」の涵養と執筆するときの無碍無我の状態であった。論文にも応用できるはずだというこの「文章=写生」観は、「文章は気也」という中国文論についての柳田の理解を基礎にしている。「唯だ、見た事、聞いた事、思ふ事、感じたことを、有りの儘にさへ書けばよいのである」という主張は、後に『遠野物語』で実践されたわけである。簡潔で的

確な表現で名文と認められる『遠野物語』（1910年）の文体は、実は格調の高い漢文の書き下しに近い。

漢文の読書は、言葉を超えて知識、観念、論理的思考の基礎となったのである。

Ⅲ 大正初期までの中国影響

1 怪談への関心と『閱微草堂筆記』

柳田の怪談についての興味はよく知られるところであり、1905年の「幽冥談」が早い事例として挙げられている。しかし先立って1901年、彼は松丘隠者というペンネームで「すゞみ台」を執筆している。当時、いかに中国の怪談本にのめり込んでいたかが窺える。

夜は字の大なる本のみを読む、曾て聊齋志異を終り今は随園が新齊諧に読入りたり、支那の狐の化方の気の利きたるは、常に我が尤も賛成する所、時々は誑されて見ばやと迄思ふ、幽霊も至極淡泊にして、詩など作りて帰ることあり、馱洒落を言ふもあり、我国の累お岩の徒は、濃情にして夜思ふに可ならず、退きて妖怪道の為に事大主義を唱へざる能はず。[柳田 1901：179]

また、袁枚の『新齊諧』にあった幽霊に騙された話については「実に小島帝国の薄志弱行なる幽霊をして、悔死せしむるに足るものありといふべし」[柳田 1901：179]と、中国への傾倒が見られる。

1905年に発表された「幽冥談」では、江戸初期の「怪談、お伽物語」の「大部分は支那の直訳である、所や人の名前はすっかり日本のものにしてあるけれども、支那の小説を訳してある」[柳田 1905：395]と一蹴できた背景には、中国小説についての柳田の広い見識があった。一方、中国の話に対して、陶醉や痛快を感じたという前文と異なる評価をしている。

支那には聊齋志異、新齋何々と云ふやうな書物が沢山ある、それで怪談などを見ると跡方も無い事を書いてある、此間もおばけが詐欺をしたと云ふのを見て呆れ返つて仕舞つた（中略）是れはどのも余りうまく出来て居るから臭い々と思つて居つたが果たして拵へ物である、少しは跡方があるのかも知れないがつまり著作が上手なのに過ぎぬ。[柳田 1905：402]

同じ幽霊（お化け）が人を騙した話に対して、「実に小島帝国の薄志弱行なる幽霊をして、悔死せしむるに足るものありといふべし」という感動から、「呆れ返つて仕舞つた」とその創作や技巧過剰への批判に転じてしまったのである。

この評価の変化を、中国好きから中国嫌いになったと短絡的に理解すべきではない。重要なのは怪談に文学としての想像力を求めるより、話の真実性を重視するようになったという柳田の姿勢の変化である。文学青年から学者へと変わりつつある柳田の内面的世界は、その批判的精神を高揚させたのである。現に、同時に高く評価したのも同じく中国のもので、『閱微草堂筆記』であった。

『閱微草堂筆記』は五書24巻、狐や幽霊、不思議体験など1200余話を記録している。その著者紀昀（1724-1805、字は暁嵐）は、あの四庫叢書の編纂を主宰した乾隆期きっての文人であった。中国の文人は、文章と学問がともに優れているだけでなく、「天下を以て己が任と為す」、すなわち社会に対する使命感も重要である。紀昀はその代表的な人物の一人で、彼の手による狐や幽霊などの話には現実社会への批判が込められており、文章、学問、社会への使命感の3つが一体とな

っている。

『閱微草堂筆記』についての柳田の評価は「怪談の研究」に見られる。

支那から出た怪談本は随分数多くあるが、どうも文を巧みにして材料に嘘のが多くて弱る。袁随園と云ふ人の『子不語』などは全部こしらへもので、聊斎と云ふ人の『聊斎志異』など云ふ本も真面目の様に書いてあるが、その実嘘が書かれてある。此等に比すると紀曉嵐と云ふ人の『閱微草堂』五種と云ふ本は、悉皆真面目のこと許り書いてある。此の書は先生の随筆五種を蒐めたもので、何でも先生が支那の北部に往つてゐる頃、聞いたり見たりした事を残らず書いたものである。若し嘘と思はれるのには『これはどうも疑はしい』と忠実に断書がしてある。[柳田 1910a : 689]

これは1910年3月の文章であったが、しかし柳田が『閱微草堂筆記』を読み始めたのは1905年であった[柳田国男研 1988b : 13]。そもそも紀昀が『閱微草堂筆記』を執筆した動機には『聊斎志異』への批判があり、その一つはすなわち創作と技巧過剰であった²⁾。この二つのことを考えあわせれば、同じ1905年に柳田「幽冥談」での中国怪談批判が『閱微草堂筆記』と深い関連があることはほぼ間違いない。

この「怪談の研究」にはもう一つ重要な情報が隠されている。上記の引用のすぐ後に、「此外支那には此の種の書物は驚く程沢山あるが、私は此頃世間でよく云ふ妖怪談にはさして興味をもたず、又不思議とも思つて居らぬ。故に私は普通の妖怪でなく重に山男に就て研究し材料を集めてゐる」[柳田 1910a : 690]と続く個所である。

1910年3月といえば『遠野物語』の出版が準備されていた時期である。当時、柳田が「山男」を考えると、中国の怪談本が念頭にあったことがわかる。さらに言えば、ある意味で中国の怪談をただ直訳したような日本の怪談本への不満、何より文章、学問、使命感が一体となっている『閱微草堂筆記』に対する敬意が、機会あって遠野の話聞いた柳田にして『遠野物語』の一冊を仕上げさせたのだとも考えられる。

『閱微草堂筆記』と従来の怪談本との形式上の違いは、大きく二つ挙げられる。一つはその文体である。六朝の志怪小説の風格に擬し、余分な描写や誇張はなく質実で簡古でありながら、叙述の仕方や全体の構造がよく練られており、余韻がある。もう一つは話の真実性を重視することである。例えば各話の冒頭に、必ず具体的な時間、人名、地名などが出てくる。この二つを、柳田が『遠野物語』で忠実に再現しようとした。佐々木喜善から口語で聞いた話を文語（漢文書き下し文）に「一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり」ことには、心のなかにあった『閱微草堂筆記』と響きあったのが大きな理由であったろう。

『閱微草堂筆記』は柳田にとって特別な意味を有する書物であった。『炭焼日記』1945年4月16、20、21日条に再読した記録があり、「三度目なり」という。

2 日本民間信仰の道教影響論

柳田の民俗学初期「三部作」と言われたものの中では、『後狩詞記』は調査記録、『遠野物語』は筆記文学であり、問題提起や解決に向かっての努力が見られ、本格的な研究を目指したのは『石神問答』であった。

『石神問答』には34の書簡が収録されている。内訳をみると、山中共古宛10通（山中より8通）、佐々木喜善宛2通（佐々木より2通）、伊能嘉矩宛2通（伊能より1通）、緒方小太郎宛1通（緒方より1通）と、同じ人物との間に複数書簡がある場合は往復という形を取っている。しか

し、唯一の例外は白鳥庫吉（1865-1942）である。柳田からは山中に次ぐ4通（1909年11月24日書簡10、12月12日書簡14、1910年2月11日書簡22、3月25日書簡29）も送っているのに、返事は一通もなかった。しかも白鳥への書簡はいずれも長文で、気合の入った内容であった。誇り高い柳田にして、珍しいアンバランスな状態であった。

二人が知り合ったきっかけはよくわからないが、『年譜』では1909年11月21日に白鳥を訪れて鏡の話を書くのが初見であった〔柳田国男研 1988b：18〕。このすぐ後の24日に白鳥へ初めての書簡が出され、さらに数日後の27日にも、白鳥の話を書き、シャマン教研究への意欲が燃えたようだ〔柳田国男研 1988b：18〕。改めて見ると、『石神問答』での白鳥への書簡はほぼ月に一回、まるで定期レポートのように送っていたのである。そして1910年4月10日に柳田が白鳥を訪問し、同じ日に『石神問答』の草稿を書き始めた〔柳田国男研 1988b：18〕。

敢えて自分からの書簡だけ載せたところに、柳田の白鳥に対する敬意が感じられる。『石神問答』は柳田本人の言葉では「エテュード」であるが、国際的視野や謹厳なる考証で日本の東洋史の面目を改めた白鳥は、まさに師のような存在であった。下って『炭焼日記』では、1944年6月19日「白鳥先生の『蕪菘考』を読むと、その研究の精透なるに感動する」、そして7月15日に大藤時彦が『西域史研究』（下）を買って来た翌日から読み始め、27日条に「白鳥氏の『西域史研究』を半分ほどよむ。『大秦蕪菘考』精透を極む」とある。柳田にして「精透」と敬服させた研究は他には見当たらなかった。白鳥の言語による比較考証、小さな問題から出発し、地道に断片を繋ぎあわせて大きな歴史の流れを再現する手法、そして欧米学問への対抗心は、柳田にとって我が意を得たりと感じたかも知れない。

柳田は『石神問答』で白鳥を相手に日本の民間信仰と中国との関係について以下の理解を披露している。

昨年申出多の雑神³⁾は、何れも神代史に所見なく、多分は南都北嶺の渡唐僧、さては其以前に吉備大臣などの将来せし所かと存じ候へ共、根拠乏しき儀何とも申難く候、此度は若干の記録に基き渡来殆ど疑なき神々の上を申上げ御参考に供し度候（中略）諸神記に見えたる王城鎮護の四方三十二神は、今も日蓮宗などに祀れる三十番神の先蹤に候が、其神々の中には天地日月山川水火十干十二支等の諸神あり、正しく道教の神に候（中略）陰陽道の輸入にも仏教と同じく大小数度の波ありしが如くに候。就中比較的後代のものに至つては多くは浮屠氏の手によりて将来したる為、既に支那に在りて仏教と調和按排せられ、我国に移りて後実は三部の習合を完成したるものに候。（中略）其威力の軽視すべからざるは、現代民間の習俗行事に道教の信仰を基礎とするもの甚だ多きを以てトするに足り候〔柳田 1910b：569〕

つまり、日本の民間信仰の根底には中国の道教（陰陽道）の影響が大きく、ただ中国において、或いは日本に伝わってから仏教と習合してしまったので、今日になってそれを証明するのが困難であるという主張である。

白鳥への最後通信でも、稲葉岩吉⁴⁾から借りて読んだ上海の宣教師が編纂した「支那に於ける大歳信仰の沿革」を枕に、日本の民間の神々と道教との関連を再論している。

荒神を竈神とするに至りし沿革には複雑なる曲折有之やうに候。今日の竈の神は唯火の用心の神のやうに候へども、唐朝頃の支那の竈神には恰も後代の庚申の神と同様の属性有之。（中略）荒神は日本の古語としては国神の帰順せざる者に候はんも、道教の思想にては即ち亦三尸と同じく人の体

内に住する数多き神の名に候へば、此点より追々竈神と一致するに至りしか

最後に大土神又の御名土之御祖神は、前の聖神と共に外來の呼称かとおぼしき語に候。併し是も又神道家の容易に首肯すまじき説なることは無論に候（中略）神道五部書などを見れば二神（土祖神と猿田彦神）同じとは見えず候へども、土祖と云ひ土公と云ひ又地主と云ふ語は、共に此等の書にて盛に説き立てしと覚しく、道教の感化の下に起りし神号なることは争ふべからず候。（中略）土公の信仰は支那にても多大な変遷あり、我国にてもさしも大事なりし大小土公の祭もいつとなく衰へ候て、終には旧弊なる柱曆の隅に僅に残墨を保ち候に至り候へども、之に反して地主神の思想は仏教と結托して永く勢力を失墜することなく（後略）

漢土の大歳信仰が奈良朝以前より日本の社会に偉大なる勢力を有せしことは殆ど疑を容れず候（中略）本居翁の如く字義に依りて年穀の神と速断するは稍危きことなりと思ひ候 [以上、柳田 1910b : 591-593]

この時期から柳田は日本の民間信仰の由来や変遷に関心を抱くようになったが、最も注意して排除しようとするのは神道の説明と仏教の影響であった。その際、中国の状況が参照となり、とくに道教（陰陽道）の影響を積極的に認めていた。

なお、この時期、1912年元旦に佐伯好郎の『景教碑考』を読了し [柳田国男研究会 1988b : 19]、1913年12月17日東洋協会で「柱松考」を講演する [柳田国男研究会 1988b : 21] など、東洋史への接近が見られた。1919年8月15日付胡桃沢勘内宛書簡でも道教研究のための情報を詳しく紹介されている [柳田 1964 : 515-516]。

3 1910年代の論法

漢文漢籍によって身体化された感受性、思考法、価値観は見えない形で働き続けていくが、目に見える形の影響は、日本の問題を考える際に、常に素材や参照として中国の知識を提供することである。

1910年代は、柳田が民俗学の世界に足を踏み入れた初期に当たるが、この時期、幼少時から身についた中国についての知識がフルに生かされていた。考察を進めるとき、中国の影響を直接主張する例は例えば1911年『人類学雑誌』で5回連載の「踊の今と昔」である。日本民間の踊りを「顕著な社会現象」として研究する野心作であったこの文章では、大きな結論として二点が指摘されている。その一番に「此風習は多分漢神の信仰と共に輸入せられし外來のものなるべきこと」 [柳田 1911 : 28] であった。

「鉦鼓を鳴して邪鬼を攘却することは支那より渡来せし風習」

「正月四日に禁裏仙洞へ参る万歳は京に住する小泉豊後と云ふ陰陽師なり。其歌の章句には一本の柱より十二の柱までの御名を唱ふことあり。是正しく古代道教の思想なり」

「蝗の災の大兵の後に多きは冤魂の化して成る所なりと云ふ信仰は古くより支那にも存し、此災害を銷除する為には金を鳴らし鼓を撃ちて之を追ふこと二国共通の風なり」

「蓋し本国の支那に在りては当時仏教は決して唯一又は最多数の宗旨には非ざりき。地方々々に固有伝來の信仰ありて彼此長短相互に雜糅せしが如く、而も我邦との交通は正式の使節に止らず、商賈私船の西海又は北国に往來する者少からざりしが故に其民間に及せし感化は極めて著しきものあ

りしならん」[以上、柳田 1911：28-54]

と、一見踊り念仏など仏教との関係が緊密のように見える民間の踊りは、実はもっと深いところには、仏教と異なる中国の「固有伝来の信仰」(道教)の影響があると説かれている。その際、「(踏歌の記録で)右に唐人の外に漢人とあるは久しく三韓に在りて後入来れる支那人の事なるべし」[柳田 1911：54]のように、中国は朝鮮半島を被さる存在であった。

『郷土研究』を中心としたこの時代の柳田の民俗学的関心は、伝説、人名・地名、山人・妖怪、民間信仰と宗教者などにあるが、「踊りの今と昔」のように直接中国の影響を主張しないときでも、「日本は……中国は……」と並列させてその関連性を暗示するか、論を進める際ぜひ必要と思わない場合でも中国の話を出したりする論法が目立っている。

①伝説について

「支那人の家の幸福は五男二女であつたが、日本の長者は二十四人の男の子を持つことになつて居る」

「道教の説に従へば金も鶏も共に西方の象徴で、又太陽信仰とも因縁がある」

「今昔物語にも隠里の話が二つまでである。武陵桃源の物語は現代人の耳にも快い感じを与える」

「武蔵坊弁慶の話が少し孫悟空と似て居るのは、其中ヘダイダラ法師を立たせて見れば、三者に共通の根源があつたのでは無いかと云ふ想像を愈々深くさせることになる」

「支那の信仰で馬廐神と云ふ神は猿で、我国にも之を輸入し、其為に猿引が正月に厩を祝い、猿の馬を曳く御札は厩の口に張られる」(以上、「伝説の系統及分類」1910年)

「白馬ヲ神聖ナル物トスルハ、本来支那ノ思想ナガラ、我邦ニテモ頗ル古キ代ヨリノ風ナリ」(「馬蹄石」1914年)

②人名・地名について

「日本でも支那でも名といふものは無闇に他人から呼ぶべきものでない」

「(日本で)出産の順位で人の字を呼ぶことは、西洋と共通でない慣習であります、支那には古くから存在して居ったのです」

「この姓氏といふものが正しく支那の王とか劉とか、陳とか張とかいふものに当るのであります。唯彼邦では褻にも晴にも其姓を使ひ、日本では国柄が単純で姓氏の数が少ないので、弁別の為に起つたのであらうが、平素には家号のみを用ゐて姓氏を称へなかつたのであります」(以上、「名字の話」1911年)

「即ち支那人が満洲の平原などの村を作り、自分の家号を地名として陳家屯、楊家寨、柳家店などと呼ぶのとは完全に反対で、吾々の苗字は却つて居住地から出て居る」(「地名の話」1912年)

③妖怪・山人について

「(妖怪の話について)しかも、近頃になつて心付くと、この話は支那から来て居る。顧炎武の『山東考古録』といふ書物は、泰山を研究した書物である」(「己が命の早使い」1911年)

「日本ニテハ珍シキ話ナレド支那ニハ之ニ似タル河牛アリ」(「河童駒引」1914年)

「(山人の歴史を国津神時代、鬼時代・物時代、山神時代、猿時代、現在という五期に分けることは)実は此分類は支那書の受売であつた」(「山人外伝資料」1913年)

「オニに鬼の字を充てたのは随分古いことであります。其結果支那から入つた陰陽道の思想がこれ

と合体して、今昔物語の中の多くの鬼などは、人の形を具へたり具へなかつたり、孤立独往して種々の奇怪を演じ（後略）」（「山人考」1917年）

「山猿一足にして反踵とは支那の書物にもあるさうだが、これ等山に居る大小いろいろの一つ目が、何故に一つ目と伝へられて居るかについては、なほ研究せねばならぬと思ふ」（「一眼一足の怪」1916年）

④民間信仰・宗教者について

「唯支那などでも祭祀の場所は、山とか丘とかいふ天然の高味を用ゆる外に、屢々人間の足で踏み散らす場所では、必ず祭壇として清浄なる土を盛つた事があるから、我邦に於ても、最初の趣旨は多分と同様であつたであらう」（「塚と森の話」1912年）

「五穀豊穡の祈祷は、支那でも然あるらしいが、日本の田舎でも通例は正月の上中旬に執り行ふ」（「託宣と祭（巫女考の三）」1913年）

「（鹿角杖は荷物用だったという仮説について）此点は聖の根原を知る為によほど重要な事であるから、支那其他の外国の類例を比較して詳しく調べたいものである」（「鉢叩きと其杖（毛坊主考の六）」1914年）

「朝鮮の寺院に残つて居る刹柱、満洲民族中の索木は、支那の華表と恐くはもと同一系統のもので、日本では諏訪其他の祭に立てる柱が之と起原を同じくするものらしい」（「柱松考」1914年）

「（トンド焼などについて）三元祭の本元たる支那南部に於て、上元中元共に、所謂燈戲の風習があつたことを考へると、此は偶然の一致では有るまい」（「柱祭と子供」1915年）

「支那でも古くから橋邊のと云ふことがある」（「西行橋」1916年）

4 柳田における仏教、西洋と中国

以上の例を見てもわかるように、すべての問題を考える時、中国が常に参照となっていた。その場合、特徴なのは、中国と日本を非常に近い位置に置き、まるで兄弟のように扱われていることである。以下の表現が典型的である。

翻訳名義集などを見れば如何なる仏教の習俗にても支那日本にて発生せしものは無きやうなれど予は之を危ぶめり。又仮に解倒懸の供養が和製でも唐製でも無しとするも少くも踊は目連尊者とは関係なし。[柳田 1911：46]

『翻訳名義集』は中国南宋の法雲が編纂した梵漢辞典で仏典の重要な梵語二千余語の漢訳を収録しているが、本来その内容は日本と直接関係はなかった。しかし、柳田は中国に肩を入れ、仏教起源を排除し、中国と日本の独自性を発見しようとしている。

柳田の仏教嫌いは有名であるが、確かに初期からその態度は一貫している。しかし中国の影響に関しては、少なくとも1910年代には、排除ではなく、むしろ積極的に認め、仏教に対抗するときの味方だと考えていた。

一方、柳田は1912年4月からフレイザーの『金枝篇』、1913年にフレイザー以外、ゴムも読み始めた[柳田国男研究会 1988b：19-20]。しかし注意されてよいのは、柳田はヨーロッパに接する場合すでに中国という基礎があり、西洋は常に中国と相互参照されていることである。

例えば1907年12月の「読書余談」では、『仏蘭西短篇傑作集』に収録されたゴージェーの「アリア・マルセラ」を読む感想として、「想は支那の小説からでも取つて来たのではあるまいかと思

はれる程、能く支那の思想に似てゐる。或は此の時分、仏蘭西に支那の小説でも読んでみたものがあつて、其れに影響されたのではあるまいかと思ふ様な節々がある」と述べられている。また「Dead Leman」についても「如何にも支那の思想から取つた様に思はれる」と評している〔柳田 1907c : 550〕。

文学だけではなく、例えば『孤猿随筆』では風景と絵画の関係を話題にしている個所がある。「西の国の風景画はその淵源を尋ねて見ると、ジョセフ一家の埃及落ちで無い場合には、多くは狩の日の追懐の中に、織り込まれて居た荒々しい山林の趣であつたやうで、此点は少々又支那で謂ふ織耕図などが、次第に田園を画材とする風習を養つたのと近いやうに思ふ」〔柳田 1927 : 285〕。

仏教に関して、柳田における仏教 vs 中国・日本という構図が見られ、その場合、中国は兄貴分で、中国の影響を受けてきた日本は弟分といえる。西洋に対して、中国はそれと肩を並ぶか、真似さえされる存在でもあつた。しかし、一方、このような中国は、また歴史、文明としての中国、書物によってだけ接した中国、言い換えれば、教養としての中国であつた。

IV 1917年の旅とその影響

1 旅行の状況

柳田が生の中国を実際に経験した最初は、1917年の旅であつた。この年の3月、柳田国男は『郷土雑誌』の休刊を宣言し、2ヶ月あまりにわたって台湾・中国大陸に旅をしていたのである。

旅先から家族宛に送られた書簡や絵葉書は2005年、一般公開された⁵⁾。「台湾支那旅行」と記された紙袋に一括して入れられていたのは、簡易書簡5通と絵葉書22通で、台湾からの6通以外はすべて中国大陸から郵送されたものである。『故郷七十年』〔柳田 1958 : 251-255〕、岡谷公二『貴族院書記官長 柳田国男』〔岡谷 1985 : 109-128〕やその他の関連資料と照合すると、この旅の行程と主な活動をやや詳しく把握することができた。

表1 1917年柳田国男 台湾・中国大陸旅行関連事項

日付	行程・行動	備考
3.20	午後7時30分東京駅を出る。	『東京日日新聞』3.22
3.22	朝、下関着。門司に2泊。製鉄所見学、福岡観光。	
3.24	午後4時、信濃丸にて門司を出る。	
3.27	早朝、台湾基隆に着く。汽車にて台北に。高等女学校及土人技芸学校の卒業式に参加。	
3.28	台湾神社例祭と中学校卒業式に参加。台北発孝(妻)宛簡易書簡。	広東総領事太田喜平・恒子夫婦に合わせて4月2日広東入りを計画したが恒子の治療で一週間遅れる。やや困るという。
3.29	午前中、台湾銀行、農事試験場見学。午後、台湾教育会主催の講演会に臨む。	
3.30	夜、台北を出る。民政長官下村広の案内で蕃地視察。太田喜平も同行。	
3.31	朝、二八水駅下車、集集、日月潭、埔里社視察、歓迎会に出席。	
4.01	霧社を視察。霧社発本人宛絵葉書「霧社全景」。	
4.02	太田喜平と上加茂視察。二八水駅発為正(長男)宛絵葉書「文旦」。	
4.03	下村は台北に帰る。柳田と太田はさらに南下。打狗市(哨船町)泊。	
4.04	車内にて孝宛絵葉書「哨船町より打狗市街を望む」。	

日付	行程・行動	備 考
4.05	台北に戻る。	
4.06	朝、台北発孝宛簡易書簡。夕方、台北懇話会主催歓迎会に出席。	「この一週日の間に先に台湾の大体を見学致候」。台北官邸で「王公に近き得意を味」う。
4.08	下村は柳田と太田を主賓に台北郊外の北投温泉ですきやきの宴をひらく。	
4.09	朝、台北発孝宛簡易書簡。	香港に向う天章丸延期で「焦心いたしをり候」。
4.10	朝10時、太田夫婦と一緒に天章丸にて基隆を立つ。	
4.11	朝、厦門着、雨で1日滞在。矢田部領事など重立の招待で南普陀寺を見学、昼食、領事館で話。夕、厦門発為正宛絵葉書「The External View of Nan-Poo-Tow Temple, Amoy」	
4.12-13	太田夫婦と一緒に厦門から汕頭、潮州へ見物。	
4.14	朝9時、香港着。船上にて孝宛絵葉書「Collection of Chinese Cues」	上海行きは接続が悪く24、5日になる見込み。
4.15	早天、広東着。日本領事館泊。	
4.16	汽車にて三水へ日帰り見物。三水から舟で広西近くまで行く。	
4.17	省長以下官人と面会予定。広東領事館にて孝宛簡易書簡。	沙面居留地、蛋民、「異国に出でて始めて日本の有難さを知り候」、通貨と相場、上海行きは早くても23日か25日になる。
4.18-19	農商務の河合書記官など一行5人で広東より汽車にて8時間の上流・韶州へ一泊見物。舟中の宿屋泊。為正宛絵葉書「Birdseye View of Oh-Te-Kak, Kulangsoo」	
4.23	広東発孝宛絵葉書「CHA-KI CANAL & GREEK, CANTON」	「広東に10日間、厄介になること、相成申候」。日付不明、譚誥明との食事。財政庁長巖君宅に招待される。
4.25	朝、汽船にて広東より香港へ。香港では三井支店長林氏宅泊。	
4.27	早天より、船にてマカオへ見物、1泊。香港発孝宛絵葉書「PANORAMA OF HONGKONG」	林氏宅で「保養の如き数日を送」る。
4.28	午後、車にて英領境界近辺まで見物、夜は香取丸の人と会食。	
4.29	香取丸にて上海へ出発。	
5.02	上海に到着。	日付不明、上海で大谷光瑞に会う。
5.03	雨。唐紹儀、孫文(戴天仇も?)、孫洪伊などを訪ねる。夜は同窓の黒葛原、村上などと会食、雷雨降電にあう。龍華発為正宛絵葉書「LUNGHUA VIEW」。	「少しくたびれ早く帰つてねたいと思ふ」。
5.04	上海滞在。上海東和洋行にて孝宛簡易書簡。	「大国だけに南に北に驚くへき相違を見申候」。昨日英語未熟でも通弁を通じて「大議論を致し頗る日本少壮派の為に地歩を固め置候」。帰国遅くなる。
5.06	朝8時上海発、滬寧鐵路急行で午後2時南京着、馮国璋の居所、官庁、明の皇宮遺跡、古物陳列所、朝陽門、明孝陵、兵營、貢院、聖廟、玄武湖、金陵大学、広知院などを見物。	『支那視察談』による。
5.07	南陽丸にて南京より漢口へ。南京発為正宛絵葉書「明孝陵石像」	
5.08	揚子江を溯行。船で30代米宣教師と英語で話し合う。夕、孝宛絵葉書「日清汽船株式会社 漢口碼頭」	「ぞつと見物をしたらは是から帰途に向ふのである。少し旅行が長過ぎたやうに思ふ。」
5.09	早朝、漢口着、市内見物。日本領事館近くの旅館泊。孝宛絵葉書「漢口日本領事館」。三穂子(長女)・千枝子(次女)宛絵葉書「漢口後花路街」	「総領事瀬川氏は旧知。混雑、「朝は殊にきたないことばかりで鼻がもげさうに候き」。
5.11	夜7時、総領事に招かれ在留民と会う。8時半南陽丸にて大冶鉱山へ。深夜着、所長西沢氏宅泊。漢口発為正宛絵葉書「漢口日本租界山崎街」	13日北京に向かう。
5.12	雨の中、汽車で鉄山見学。所長邸宅にて孝宛絵葉書「所長邸宅」	子供が緑青をくれる。

日付	行程・行動	備考
5.13	早朝漢口に戻り、11時半の京漢線急行で北京へ。	
5.14	午後北京着、六国飯店泊。北京にて孝宛絵葉書「Peking. Chien men」	「南北風物の差は一国の中ともおもはれず」近郊の村の屋根、ラクダと都城内との対照。「深夜驢馬かしましく嘶き異郷の感深し」
5.16	議会傍聴か、参議院、衆議院の議長と歓談。午後大總統に謁見、1時間話す。夕、北京にて柳田直平宛絵葉書「Peking. Ming Tomb」	北京政局危殆「よき折に参り合せ少分なりとも邦国為に役立ち候は、独り身の面目に止らすと願居候」。「短日にて一切名所巡歴を断念いたし候」
5.18	北京。為正宛絵葉書「津浦路黄河鉄橋、(寄書き)劉崇傑、権量、柳田国男、中山龍次、姚国禎、唐在章、孫潤宇。	日付不明、北京で林権助公使、鈴木虎雄など数名の友人と会う。清華大学へ見学、顧維均(Wellington Koo)に会う。
5.20	武英殿帝室宝物陳列見物か。北京発、集堂のおたきさんに会いに天津1泊。北京にて孝宛絵葉書「武英殿門外景之二」	北京以降京城までの予定を孝に知らせる。
5.21	済南泊。	
5.22-23	青島泊。グランドホテル。	苦力の話を書く。
5.24	山東省九水へ見物。夕方青島より大連へ向かう。青島発孝宛絵葉書「山東省九水」、青島発胡桃沢宛葉書。	寄り道のため大連以降予定一日ずつ遅れる。
5.26	朝、大連着。	
5.28	大連発孝宛絵葉書「大連埠頭構内貨物倉庫大豆集積ノ光景」	「折角来たこと故、線路を日中に見て行き度、奉天安東京城に一泊の上二日頃帰着候も、けふは大連占領の日」
5.29	夜、奉天着、ヤマトホテル1泊。奉天発為正宛絵葉書「奉天北陵附近の放牧」	「夜分でどこも見物せず」
5.30	夜、京城に着く。学務局長官舎泊。	
5.31	午前、長谷川好道総督を表敬訪問、京城高等普通学校、女子普通学校を参観し、午後総督府で高官を歴訪。	
6.01	朝、京城より釜山に向かう。	
6.02	朝、釜山より関釜連絡船にて下関着。長府その他巡覧。	
6.03	午後1時50分東京駅に着く。お土産話「六十余日の旅を了へて」	『東京日日新聞』64
6.27	午後7時神田学生会館にて支那旅行談「五万の苦力が英仏へ」	『東京朝日新聞』628
7月	帝国農会訪問談「南支那の苦力」	『帝国農会報』7-7(7.15)
不明	流行会にて広東の話。	6.15 胡桃沢勘内宛書簡。
7.16	夕方、経済学研究会で話の予定。	同上。
7.28	松本小学校で講演「支那視察談」	『支那視察談』

2 旅行計画の変更と中国印象

柳田は1915年に結成した「日支国民協会」のメンバーであった〔柳田国男研究会 1988a: 361〕。亀井陸良の斡旋によって出来たこの協会には、頭山満、寺尾亨、宮崎滔天、水野梅暁などが参集し、孫文の中華革命党に同情を持っていた。柳田の参加経緯を知り得る資料はまだ見当たらないが、少なくとも、彼が現実の中国や日中関係にかなり関心を寄せていたことは間違いない。新任の民政長官下村宏に台湾に招待されると、広東総領事である太田喜平(養家の叔父安東貞美の娘婿)の関係で広東、そして当時孫文がいる上海へと足を伸ばすと計画するのはごく自然なことである。

この旅について、1917年3月22日付『東京日日新聞』「柳田翰長渡支」では「廿日午後七時三十分東京駅発南支那及び台湾各地視察の途に上れり五月上旬帰京の筈」〔柳田国男研究会 1988: 386-387〕と報じられている。

期間に関しては5月4日付柳田より孝宛書簡での「為正誕生日(引用者注5月11日)迄と申候がどうやら御許誕生日に頃になりさうに候」〔田中 2005: 167〕と一致している。旅先に関して、

「南支那」という表現はやや引かかる。上海や漢口は正確には「中支那」だからである。しかし上海への予定は早くも4月14日付絵葉書で確認でき、広東に着く前のことだったので、最初からの計画だった。するとここでの「南支那」は大まかに揚子江流域以南を指しているかもしれない。5月8日付漢口に向かう船中での絵葉書「ざつと見物をしたら是から帰途に向ふのである。少し旅行が長すぎたやうに思ふ」という表現からみれば、計画では漢口までだったようだ。

北京は「南支那」になることは有り得ないし、柳田が「大国だけに南に北に驚くへき相違を見申候」（5月4日書簡）と述べている時も、北は即ち上海であり、北京を想定していなかった。北京行は5月11日付絵葉書で初めて妻の孝に告げられ、そして20日付絵葉書でわざわざ北京以降の全日程の予定を伝えている。北京と、以降の天津、済南、青島、大連、奉天、京城、釜山などは現地での追加と考えたほうが自然であろう。

漢口からさらに北上するという計画変更には勿論、柳田自身の願望や判断が入っていた。政治的な理由は別として、中国のような広い国に対して「二箇月ばかりで南北共に見ようとは少し無理だが一ぺんに歩かないと印象が身に浸みて来ない」[柳田 1917a: 235] と考えたことが大きな要素の一つであった。

台湾、広東と上海の相違にすでに驚いたのであるが、北京につき早々「南北風物の差は一国の中ともおもはれず」との感想を抱くようになった。「此郊外の村々は何れも土の平屋根にて平蕪□□（広漠か）と塵高く空を蔽ひラクダ往来す。但し都城の内景は花やかなる文明の色彩なれとも、深夜驢馬かしましく嘶き、異郷の感深し」[田中 2005: 174] と感無量であった。

華やかな都市生活より、郊外の農村や風景が柳田に深い印象を残した。特に広い分、日本と比べて風景の変化が少ないことは以降、何回も言及されていた。

支那などは実際平蕪広漠の地であつて、十日半月の旅を重ねて、僅かに山水の変化を見るといふ有様だ。（「旅行の進歩及び退歩」1927年）

日本はどちらかといふとよい旅行のし易い国である。例を隣の支那や満州にとつてみると、あの国で、あの平原の真中に住んでゐては、どんなに上手に旅行しようとしても、無駄な所を歩かねばならぬ。（「旅行の上手下手」1934年）

柳田にとって漠然と把握しにくかったのは、何も風景ばかりではない。

1912年、封建王朝にかわって中華民国が発足したが、以降、宋教仁暗殺、第二革命、日本の対華21ヶ条要求、袁世凱の帝政復活と失敗が続いていた。1916年7月、袁世凱の後任として黎元洪が大総統に就任したが、次第に彼を傀儡化しようとする北洋軍閥の総理段祺瑞との関係が悪化し、5月23日に段祺瑞が罷免されることになった。柳田国男が北京を訪れた5月中旬は、ちょうどその直前に当たる。北伐戦争により南北対立、軍閥割拠から全国統一へと進むことはまだ10年後に待たなければならず、当時の中国は進路もまた混沌として先が見えなかった。

風景（南京城内の田園や城外の湖、青島の九水名勝など）以外、現実の中国が柳田に与えた印象は、都市の混雑や不潔（厦門、広州、漢口）、時間の空費（踏青、茶館）、人命の軽視、上層と民衆との分離、欧羅巴かぶれ理屈倒れなどから一輪車の軋む音の不快さまで、おおむね消極的なものであった。上層の食文化を評価したもの、嗜好の過剰発達や民衆との分離などの欠点も指摘している⁶⁾。

中でも無反応、無感動のように映った民衆にはかなりがっかりしたようだ。柳田は帰国早々のイ

ンタビューに対して民衆の「乱後の俤も見えながら、またそれと没交渉に歩いてゐるところが支那の国柄を見るやうに哀れを感じた」と述べ、「在留の日本人でも誰一人支那の将来を予言し得ないのは道理、支那人自身すら知りつゝ、歩く一人さへ無からう、吾々も万一自由な地位ならば却つて先方の側に立つて大に叫んでやり度いやうな気がした」〔柳田 1917a : 235-236〕と熱く語っている。

3 『支那視察談』にみる「国民外交」観

旅行後、柳田は取材を受け、また幾つかの集まりで旅の見聞や感想を話し、文章も発表していた⁷⁾。しかし台湾や朝鮮などの植民地には全く触れず、もっぱら中国大陸のことを言っている。門司発から下関着まで大凡70日であるが、台湾での滞在は14日間、しかもその半分強はやむを得なかった延期であった。この旅は植民地台湾がきっかけとなったが、柳田にとって中国が最も関心の所在であった。しかし一方、それらの記事や文章を見れば、移民や食文化など具体的な状況についての紹介があってもまとまった中国観や中国論は見られない。

『支那視察談』はまさにそれを補ってくれる貴重な資料である。1917年7月28日、松本中学校で東筑摩郡と松本市両教育会の主催で「支那視察談」と題する柳田国男の講演会があったが、会を設営した胡桃沢勘内による筆記は1998年、石井正己氏の調査で復刻されている〔柳田 1917b〕。

講演の計画はそもそも柳田が中国の南北を一通り経験した5月24日に青島より胡桃沢宛に「ゐまの中に誰かと印象を分かち度候」〔胡桃沢 1978 : 83〕との葉書を寄せたことに始まった。帰国早々の6月10日と15日に胡桃沢宛に書簡を送り、日付について相談すると共に、講演に使う地図について具体的な指示を出して作成を依頼し〔柳田 1964 : 498〕、かなり気合が入っていたことがわかる。

地方の教育会が組織した一般向けの講演会なので、話は総論的なところから始まった。柳田はまず「支那通」を狭義の支那通（中国をよく知る者）、支那通い（日中間をよく往来する者）、支那通り（中国を通過する者）に分け、逆説的に「支那は到底不可解の国なりと云ひ得るまでにならざれば、真の支那通では有りません」と主張する。そして「自分は此第三種に属するものでありますけれども、支那が不可解なることは深く感じて居るもの」として「吾人が今迄の支那に対する観察が根本的に誤れるものではなかつたかと思ひましたので、この問題を選んで御話せんとする」と主旨を鮮明に出した。

新聞の取材にも「誰一人支那の将来を予言し得ない」と述べているし、柳田にとって二ヶ月もの大旅行で得た最も深い印象は「支那が不可解なること」であった。ここの「不可解」は理解不能ではなく、規模が大きく複雑なので理解するのは簡単ではないということである。次に柳田は真の理解に至るためにどうすれば良いのかを論じているからである。

まず重要なのは態度である。柳田は日本人の中国蔑視を強く批判した。江戸時代は「少くも日支親善の真をつくしたるもので」、阿片戦争のときは「支那に対する同情は非常にあつ」かったが、日清戦争以降は「支那に対する態度は憎み軽蔑する様になり」、「欧米諸国と共に支那を目的物として見る如き態度」となったという日本人中国観の変遷を振り返え、「日本人はあまりに欧米人の支那に対する態度に学び過ぎたるには非ざるか」と問いかけてみた。そしてそこから脱出し、日本自身の問題として中国の問題を考える必要性を説いている。「支那の問題は日本の庭の井の中の問題でありまして、非常なる問題」であると。

次に重要なのは主体である。そこで主張されたのは「国民外交」であり、「国と国との交りは国

民と国民との交りでなければならぬ」という。

国策の峙立は国民の自覚によるに非ざれば、為すことは出来ません。統一ある国民の態度は甚だ必要であります。然れども問題には緩急の別があります。対英対露勿論ゆるがせにすることは出来ませんが、支那のことは実に最も急を要するものであります。その如何によつては我国の存亡に関することでありまして、その態度を誤らば実に末代までも恥であります。されば可成多数の人々が最もより多く支那を理解し同情することを希むものであります。理解すれば同情が起ります。同情に基きたる声援は干渉ではありません。

即ち、国策は国民の意思に基づくものなので、真の日中友好の基礎は政府の外交ではなく、国民一人一人の中国に対する理解、同情、声援であり、それはまた日本の未来に関わる最も緊要なことである。

そのために、あり得る障害も知って置かなければならない。それは、報道機関への過信や、中国に行ったことがあるからわかっているという思い込みである。とくに後者についてやや詳しく説明された。

文武の官吏とか、支那にて外人にのみ接する人々（商人の如き）のみ見て帰るは、望むべきことではありません。中流、上流の人、案内人、ホテルの使用人、開港場の人々等の風俗のみにて全体を押しつけて考えれば、甚だ誤つて居る（中略）是等はほんの僅かで、其他に多数の支那あるを思はなければなりません。支那四億と申しますけれども、三億はあるであります。

人口の大多数を占める普通の中国人を見て中国を理解すべきという主張である。この主張は、後にジュネーブ滞在を経て文明国にも適用された。

どんな国でも皆背後には三分の二、五分の四ばかりの只の人、不断着で働いて居る人がある。外国をあるき殊にその田舎を見た人なら、大抵は知つて居ることだが、支那や露西亜の内輪の様子は、評判にも聞えて居るから驚かぬとしても、其他一廉の顔をする文明国でも、まだまだ在来の農民や労働者の多数は無茶なものだ。（『農民文芸と其遺物』1927年）

『支那視察談』ほど、集中的に柳田の中国観が窺える資料は他に見られない。この中で示された柳田国男の日本人中国観の変遷に対する反省と批判、日中関係に対する認識と提言は、いずれも問題の本質を鋭く突き、一流の見識を見せていると言えよう。正しい理解はすべての基礎であり、それは表、少数の人々、特別な場合からではなく、裏に隠れている大多数の人々の普通の状態から得なければならない。この日中関係を論じるときの論理は、後に確立した「常民」の学問としての民俗学の論理とは、根が一つであった。

4 1918年の中国関与

「理解すれば同情が起ります。同情に基きたる声援は干渉ではありません」というように、中国に対して理解にとどまらずさらに感情や行動へと連動していく流れが想定された。その際の言動は、広い意味でのアジア主義的色合いが濃厚となる。

「支那視察談」での「不具者、失明者、医術、衛生思想等に対する事業の如きは、我国の諸外人

に及ばざること甚だ遠くあります。同文同種日支親善等と説へながら猶外人の事業に及ばざるは、何たる有様でありませうか。革命によつて更に進むべき道に迷ひつゝある隣国を指導をせざるは、何等の不見識でありませうか」という声高らかな主張はその現れの一つであった。旅行後、積極的に中国関連の活動に関与していったこともまた、一つの現れであった。

『大正七年日記』から1918年の柳田の精力的な活動を知ることができる〔柳田 1964：293-344〕が、章士釗、殷汝耕、唐紹儀、戴季陶など中国の要人との面会や宴会（10月12日、14日、21日、23日、27日、29日、30日、11月9日、11日、25日）、「支那経済学会」事務所移転の幹旋（10月2日、8日、9日）、「支那クラブ」創設や「海蘭鉄道」借款の根回しなど中国関係の内容が目立ち、中でも「支那クラブ」や「海蘭鉄道」の2件には最も力を入れていた。

「支那（日華）クラブ」については、10月12日「支那クラブ」創立への尽力という水野梅暁の要請を受け、柳田は14日に中華料理店「日華」で水野、小村俊三郎、五百木良三、末永節と「支那関係のクラブを作る」ことについて相談した。恐らくこの会合でクラブの名前を「日華クラブ」に決めたのだろう。23日に近衛文麿が来訪の機会に「日華クラブ」のことを勧めたという。さらに26日に白岩龍平、外務省の小村欣一（小林寿太郎の長男）を訪ね、協力を依頼し、27日に電話で水野に二人の快諾を伝えた。11月21日夜、華族会館で近衛を招き、小村（俊）、小村（欣）、白岩などと相談し、22日に同じ華族会館で5人に末永、五百木、水野を加わり、「一同意見よく一致す」。12月31日、宮内の大祓の儀式で原敬に会い、クラブの助勢を頼み、夜、1月7日に予定された集会の議題を印刷して近衛ら発起人へ配ったようだ。

その他に10月25日に三菱の木村林次郎を訪ね、「日華会館」の建物に関して赤星陸治への相談を依頼し、28日に木村から返事を得たという記録があるが、この「日華会館」が「日華クラブ」のための施設である可能性が高い。しかし、その後クラブは結成されたのか、されたならその性格と活動はどのようなものであったかは、残念ながら不明である。

一方、1925年に発足した「日華倶楽部」についての記録が、外務省外交史料館が所蔵している〔外務省 1925〕。資料では、10月20日午後、芝公園三縁亭で日華倶楽部の創立総会が開かれ、安達通相、小村欣一、会長町田経宇、名誉会長汪榮宝支那公使、常任幹事宮田光雄、理事樺山資英、評議員犬養毅や森恪など36名が出席したことを報告している。倶楽部名簿の評議員にはその他に小田切万寿之助、中野正剛、大西斎などの名前も見られる。

この「日華倶楽部」と柳田が積極的に関与していた「日華クラブ」とは名称が酷似していること、創立総会に出席した小村欣一が「日華クラブ」発起人の一人で、評議員の犬養、中野などは「日支国民協会」のメンバーで、「日華クラブ」発起人の末永などと非常に近い関係にあること、そして趣意書の内容⁸⁾は柳田の考え方に非常に近いことなどで、両者は無関係ではないように思われるが、その究明は今後の資料発掘に期待するしかない。

海蘭鉄道については、盧（溝橋）漢（口）鉄道の支線として1904年着工した汴（開封）洛（陽）鉄道が1909年完工したが、東に開封—清江浦—海州まで、西に洛陽—西安—蘭州までそれぞれ伸ばし、中国北部を東西に横断する隴秦豫海鉄道（日本側という海蘭鉄道）が計画されるようになると、1912年9月、北洋政府は契約優先権のあるベルギー側との間に鉄道借款の契約を結んだ。ベルギーの背後にフランス、とくに凍らない良港を確保したいロシアが控えていた。しかし第一次世界大戦の影響でヨーロッパでの資金の調達が困難となり、工事が難渋すると北洋政府は1915年に日本の大倉組に短期公債の形で資金提供を依頼した。日本政府はこれを機にベルギーに代わって或いはそれと並んで借款国になり、中国での権益を拡大しようとした⁹⁾。

柳田は1918年10月14日に本郷房太郎大將（前青島守備軍司令、当時軍事参議官）を訪ね、26

日に小村欣一に相談して「よき返事」を得た。30日以内田康哉外相、11月1日に高橋是清蔵相にそれぞれ面会し、実現のために奔走した。1919年2月に日中間仮契約段階に入ったが、結局ベルギー側の反対で失敗に終わった。

「海蘭鉄道」の一件に対して『柳田国男伝』は「彼自身の愛国心から、欧米列強に伍していくためにも、中国における日本の利益を守らなければならない」[柳田国男研 1988a:363]と評しているが、問題はそう簡単ではない。外交史料館の関係書類を見ても、日本側は一貫して外務省と大倉組を中心に動いており、柳田の行動との因果関係ははっきりしない。そして何よりベルギーから日本に乗り換えるというのは、そもそも資金不足に悩まされた中国側が再三日本に提案されたことでもあった。

1917年5月18日付柳田が北京から為正に送った絵葉書[田中 2005:177]には劉崇傑¹⁰⁾、権量¹¹⁾、柳田国男、中山龍次¹²⁾、姚国禎¹³⁾、唐在章¹⁴⁾、孫潤宇¹⁵⁾という7人の寄書きがあった。この中で、劉、孫は対日外交の重要人物、権、姚は政府交通系の有力者、中山は交通部の日本人顧問、そしてロシアへの不満を抱いている唐の存在、このような場ではロシア・日本絡みの最も大きな交通プロジェクト「海蘭鉄道」が話題に上らないのは逆に不思議である。中国側が希望した鉄道借款の日本乗換の実現のために、柳田は政府の思惑とは別に動いていたと理解すべきであろう。

何れにしても無断で台湾中国の旅を計画したことも一因となり、間もなく1919年12月23日に、柳田は貴族院議長徳川家達との不仲で書記官長の職を辞して、官界を離れた。以降、表立って政治的な行動に関わることは避けられ、「日華クラブ」や「海蘭鉄道」などの行動は最初で最後となった。しかし理解から生じる同情に促された行動への肯定は、思考様式として残り、1920年代の日本の対中政策や日中関係に関する論説文、さらに1940年代の中国に関わる学問の実践や模索につながっていく。

5 移民・舟・島

1917年の中国旅行の重要な影響は他にもある。まず、海外出稼ぎと移民問題についての関心である。

5月22-23日、柳田国男は青島を旅行し、グランドホテルに泊ったが、ホテルの宿泊客の大半はヨーロッパに輸出する労働力の募集で山東にきている者であった。そこでいろいろな情報を知り得たのであるが、全体的に「苦力の取扱は非常に立派に」[柳田 1917c:236]になったという感想を持つようになった。帰国後の6月27日夜、神田の学士会館でそれを話題にした支那旅行談の要旨は、翌日「五万の苦力が英仏へ」と題して『東京朝日新聞』に載った。

さらに7月に帝国農会の訪問談でも「南支那の苦力」を話題にした。海外へ渡る中国の出稼ぎ労働者について、出身地は山東省と広東省・福建省に限られていること、必ず郷里に帰ってくること、山東出身者は北へ、広東・福建出身者は南へそれぞれ進出し、上海が南北の境目であるという3つの特徴があると述べた上で、広東・福建の下層民が親類近隣伝いに南洋方面へ渡り、東南アジアの一部では人口の大半を占め、経済的・政治的に一大勢力となり、彼等からの莫大な送金は故郷の経済を支えている状況を紹介している。[柳田 1918:237-238]

旅行経験に触発された移民問題への関心は、中国の状況の紹介に留まらなかった。柳田は帰国後早くも1919年2月2日に日本移民協会の総会に出席し[柳田国男研究会 1988:24]、やがて1920年代半ば、日本における人口問題と関連させて集中的に論じていた¹⁶⁾。その際、国が介入しない自主的な選択としての移民論を唱えているが、その手本に中国の南洋移民(華僑)を置いていた。また旅行後、移民先である南洋に対する興味も生じ、翌1918年から弟の静雄との共同研究や

オランダ語の勉強が始まり〔柳田国男研究会 1988：23-24〕、後年国際連盟委任統治委員を受諾する素地を作った。

そして民俗学との関係でいえば、よく知られているように、水上生活者への関心も中国旅行の経験と深く関わる。

1917年4月17日付孝宛の書簡は、中国大陸から最初の書簡で、また旅行中で最も長文のものであるが、その内容の大半は、「蜑民（蜑民）」についての経験であった。舟を住居として水上生活を営む人々は中国では「蜑」或いは「蜑家」と呼ばれ、長い歴史がある。1970年代以降の都市整備や上陸推進政策などで急速に消えていったが、1910年代当時はまだ数が多く、とくに柳田が旅した香港、マカオ、広東、福建あたりは、蜑民が人口を占める割合の最も高い地域であった。広州で宿泊していた居留地沙面が埋立地で、その周りの水路にも「ギッシリと住みをり」という状況である。とくに日帰りで旅行した三水で雇った蜑民の舟で、「兄妹の二人の幼童艫をこぎ助けをり」現実を目のあたりにして「異国に出で、始めて日本の有難さを知り候事、一に非ず候」と、その生活の苦しさにすっかり心が動かされた〔田中 2005：160-161〕。

この経験はよほど印象が深かったようで、日本に戻ったら「本も読むし、また同じようなくらし方をしている日本の海女などと比較できるものか」と思い、わざわざ「用事を作って」〔柳田 1958：255〕九州に旅行した。これは1919年5月1-12日の九州旅行であった〔柳田国男研究会 1988：25〕。4-6日佐賀県東松浦郡呼子の漁村を見物し、平戸島田助で家船の児童について話を聞き、8日に長崎県立図書館で旧記の関係記録を調べ、さらに10日に大分市でシャアの舟を見た。12日に貴族院の火事で急遽帰京したのでなければ、もっと詳細な調査をしていただろう。水上生活者の話はまず旅行直後23日の同人会で話をし〔柳田国男研究会 1988：25〕、さらに1921年2月23日長崎商業会議所での朝日講演会〔柳田国男研究会 1988：27〕、1939年1月29日114回木曜会〔柳田国男研究会 1988：55〕でも話題にした。

中国の蜑民や日本の家船に対する興味は、単に特殊な生き方としてではなかった。ほぼ同時に起こった島への興味を考えあわせれば、その背後に、歴史に埋もれた水上世界の開眼ともいべき、大きな着想が形成しつつあったことがわかる。

1919年2月、南洋への興味もあり、『英領ニューギニア誌』や『スウ島誌』を始め、島誌を多く読むことになる〔柳田国男研究会 1988：24〕。1920年朝日新聞社客員となつてからの東北、関西・中国、沖縄への旅が有名であるが、それに先立って6月15-24日は佐渡島に旅行していた。島に残っている北方の海女の伝統を通して、それは一地に限られた特殊現象ではなく、国史の中で忘れ去られた大事な一頁である仮説を確認するためであった。

中国の労働者や移民のことで改めて認識した「よりよい生活を得るための人の移動」、蜑民を通して再認識された「移動の手段と生活の場が一体となっている舟」、さらに移民によって触発された南洋への興味と重なり考え始めた「生活の場としての島」。実は晩年の『海上の道』での議論の骨格はすでにこの時期に形成されたと見てよい。この直後の沖縄旅行で、柳田は日本人の源郷を発見するが、しかしそれには沖縄で初めて接した言語や信仰などの現象だけではなく、沖縄の旅に先立って形成しつつあったこの人の移動・舟・島という着想も大きく関わっていたと理解すべきである。

V 終わりにかえて

駆け足で1920年代までのことを整理してきたが、まず気づくのは柳田国男と中国の関係は思っ

たよりずっと深かったという事実である。

明治期に入り、文明開化のもとで、日本社会の西洋化が進んでいった。教育においても、欧米式の学制を整え、お雇い外国人を招聘し、内容と形式の両面において旧来の教育からの「脱却」を目指した。加えて文章においても文語から口語への変化があり、かつて一般教養だった漢文漢籍が、次第に単なる試験の対象へと形骸化、矮小化していく。

明治初期に生まれた柳田は、新旧二種の教育を一身に受けた第一世代に当たるが、儒医の家庭に生まれた環境もあり、人一倍優れた漢文力を身につけていた。それによって勉強、表現の基礎が出来ただけではなく、漢文読書を通して知識、観念や思考法が形成していた。

明治末期、柳田はその目指すところが文学から学問へと変わりつつあった。偶然聞くことができた遠野の不思議な話を漢文調で一冊に仕上げる発想とその書き方の基本には、文章、学問、使命感が一体となっている『閱微草堂筆記』の影響が大きかった。

そして日本の民間信仰に興味を持ち始めた柳田は、白鳥庫吉への敬意もあり、『石神問答』で道教影響論を展開した。1910年代では柳田は伝説、人名・地名、妖怪・山人、民間宗教及び宗教者などについての考察を精力的に勤めていたが、その際、常に中国のことを参照し、積極的に中国影響論を唱えていた。中国は柳田にとって、対仏教のときの兄弟であり、また西洋に接するときの基礎や参照でもあった。

この教養としての中国は、柳田の人生に一貫して大きな役割を果たしていくが、一方1917年の旅で柳田は現実の中国を初めて経験することとなった。

途中で北京を始めとする北方地域を訪問先に追加し、ハードな旅程の中で中国の南北を一通り旅した柳田は、国土の広さや南北の相違に驚き、混沌して先が見えない中国の現状を目にした。中国を正しく知ることの重要性、その際、裏にいる大多数の人々について知ることが大事であるという理解は、帰国後に主張された「国民外交」の基礎となり、さらに後にヨーロッパ経験を経て「常民の学」としての民俗学の発想に発展していく。

中国への連帯感とは、柳田にして1918年に「日華クラブ」や「海蘭鉄道」を始め中国に関連する様々なことに積極的に関与させていた。官界を離れて政治的行動が見られなくなってからも、時局関連の論説文や中国に関わる学問実践などにつながっていく。

一方、中国経験によって触発された移民、南洋、家船などに対する関心は、やがて一つとなり、人の移動・舟・鳥と互いに関連して、「陸の歴史」に対する「海の歴史」ともいうべき着想に発展し、沖縄への注目、そして『海上の道』に結実した。

しかし、1918年あたり、以下のように中国と距離を置くような文章も見られた。

そんならこの類の諸国の話は、支那からもしくは和漢共通の源から起つて、だんだん各地に散布し且変化したと解してよいかといふと、自分は容易にしかりと答へ得ぬのみならず、また仮にさうとしても、何故に我々の先祖がそのやうな話しを信じて怖れたかについては、新たに考へて見ねばならぬ事が多い。(「橋姫」1918年1月)

注意されているのは、同じ時期の文章では、かつて仏教 vs 中国・日本という図式が、微妙に仏教・中国 vs 日本に動いていたことである。

仏教ならびに支那の思想のつけ添へから推して見ても、龍宮は賽の国如意の国、最も敬虔にして且つ幸運なる者が、わづかに稀に於いて行はるるものと考へ得るに至つたのである。(後略) (「隠れ里」)

1918年2月)

これは政治や言論で現れた中国への連帯感とともに、中国旅行の直後に現れてきたことが重要であろう。現実の中国が柳田に与えたイメージは消極的なものが多かった。それが文化的に中国を祖とする考え方への抵抗感につながったのも不思議ではない。そういう意味で中国の旅は、文化において中国への距離感、そして政治的において中国への連帯感の両方をもたらしたと言える。

文化的には仏教 vs 日本、現実や学問的には西洋 vs 日本というのは、柳田国男の基本的な立場である。そのような柳田にとって中国は、二者の間に介在して、必要によって時には遠く突き放されたり、時には近く引き寄せられたりする存在でもあった。自分の必要によって利用したりしなかったりする漢文漢籍もまた同じような役割を果たしていると言える。しかし、また逆説的に、それはずっと身近に存在しており、ある意味身体化された証拠でもある。

福井直秀は柳田の第一次大戦末期の文章には中国との断絶を強調するものが多いと論じている〔福井 1996 : 486-487〕が、しかし、全体的にみれば、1918年あたりのこのような状況は断片的、局部的でしかも一過性のものであった。1920年代にはこのような論法はあまり見られず、中国影響を排除する論法の定着は1930年代に入ってからのことだと見なければならぬ。1920年代以降の柳田国男と中国の関わりについての整理と分析、そして30年代に入ってからの変化とその意味などについては、また別稿に譲ることとする。

注

- 1) 高橋正夫は医文両全という視点から本居宣長を論じるとき、そのことを指摘している(高橋 1986 : 17-20)。
- 2) 魯迅の指摘による(丸尾 1987 : 134)。
- 3) ここでの「雑神」は道祖神、山神、荒神、姥神、子ノ神、子安、石神、サグジ、水神、田神などを指している。白鳥宛 1909年11月24日付書簡 10 参照(柳田 1910b : 526-530)。
- 4) 当時、白鳥の尽力で創設された満鉄地理歴史学術調査部に勤めていた。
- 5) 田中正明編『柳田国男の絵葉書』の【国外編】〔大正6年(1917年)〕No.127-153(田中 2005 : 151-181)。
- 6) 「本場の広東料理」『新家庭』3-4、1918年。『柳田国男全集』25所収、268-272頁。
- 7) 「六十余日の旅を了へて」『東京日日新聞』1917年6月4日付、「五万の苦力が英仏へ」『東京朝日新聞』6月28日付、「南支那の苦力」『帝国農会報』7-7(7月)、「神道私見」『丁酉倫理会倫理講演集』185~186(1918年1~2月)、「本場の広東料理」『新家庭』3-4(4月)など。『柳田国男全集』25所収。
- 8) その趣意書は、世界大戦が終結後、国際資本戦、経済戦が鮮烈になり、東洋が焦点となっている形勢において、日本と中国との親善が重要な意味を持つが、国交の親善は国民の接触と理解に待たなければならないことで、従来局部的、割拠的な対支団体とは異なる「普通の国民的社交機関」が必要となり、「日華倶楽部」は国民往來の斡旋と援助以外、文庫、叢書、会館、講演及び集会などの事業も行う「研究的社交機関」を目指し、次第に範囲を中国にも拡張し、南方派、北方派など政党や政権に偏らない姿勢で両国の真の理解を得るよう努力する、と宣言している(外務省 1925)。
- 9) 海蘭鉄道について1898年からの関連資料を納めている(外務省 1898)などがある。
- 10) 劉崇傑は早稲田大学卒、日本駐在公使館一等参事官、日本駐在公使代理を歴任し、当時は國務院参議兼外交部参事であった。
- 11) 権量は東京高等商業学校卒、交通部参事、交通部次長代理を歴任し、1917年5月から交通総長代理であった。
- 12) 中山龍次は後に電信通信協会初代会長、戦後、新潟県十日町市初代市長。当時は通信省技官にして中華民國の交通部顧問(1913年5月より)を務めている。
- 13) (田中 2005 : 177)では「姚国積」となっているが正しくは「姚国禎」のはずである。1913-1916年は交通伝習所(交通大学北京学校の前身)所長、後に交通部部長となった人物である。
- 14) 唐在章は当時國務院咨議であった。唐在礼(日本士官学校砲工科卒)の弟。1910年、実業を起こすつもりで、軍咨府の命令で兵備処総弁として庫倫に赴く兄に同行したが、ロシアの干渉で兵備処は撤廃され、二人は

1911 年末北京に戻った。

15) 孫潤宇は法政大学卒、衆議院議員、1914 年日本駐在公使館一等参事官、1916 年から外交委員会理事を務めた。

16) 1924 年『東京朝日新聞』10 回署名入り連載の「国際労働問題の一面」、1925 年『植民』5 回連載の「移民の移民論」、朝日講演の「移民政策と生活安定」、『通俗経済講座』2 回連載の「日本の人口問題」など。『柳田国男全集』26、筑摩書房、2000 年収録。

参考文献

井上通泰

1972 「雷の禪に河童の屁一喰眼録の由来」『柳田国男回想』白井吉見（編）、pp. 5-8、筑摩書房。

王京

2008 『1930、40 年代の日本民俗学と中国』神奈川大学 21 世紀 COE プロジェクト推進委員会。

岡谷公二

1985 『貴族院書記官長 柳田国男』筑摩書房。

外務省外交史料館所蔵

1898 「海蘭鉄道関係一件（白国借款）」（第一巻 B04010977100、第二巻 B04010977700、第三巻 B04010978300）。

1925 10 月 21 日付警視総監太田政弘より若槻礼次郎内務大臣、幣原喜重郎外務大臣及び指定庁府県長宛の外秘第 2686 号公文（B03041032500）。

胡桃沢友男

1978 「柳田国男と信州七」『信濃』30-9、pp.69-89。

高橋正夫

1986 『本居宣長』講談社。

田中正明編

2005 『柳田国男の絵葉書』晶文社。

福井直秀

1996 「柳田国男のアジア認識」『近代日本のアジア認識』古屋哲夫（編）、pp. 469-508、緑蔭書房。

丸尾常喜

1987 「訳注 魯迅『中国小説の歴史の変遷』」『北海道大学文学部紀要』35-1、pp. 59-152。

柳田国男

1901 「すゝみ台」『太平洋』2-29~30、33。『柳田国男全集』23、筑摩書房、2006 年所収。

1905 「幽冥談」『新古文林』1-6。『柳田国男全集』23、筑摩書房、2006 年所収。

1907a 「写生と論文」『文章世界』2-3。『柳田国男全集』23、筑摩書房、2006 年所収。

1907b 「乱読の癖」『文章世界』2-6。『柳田国男全集』23、筑摩書房、2006 年所収。

1907c 「読書余談」『趣味』2-12。『柳田国男全集』23、筑摩書房、2006 年所収。

1910a 「怪談の研究」『中学世界』13-3 号。『柳田国男全集』23、筑摩書房、2006 年所収。

1910b 「石神問答」聚精堂。『柳田国男全集』1、筑摩書房、1999 年所収。

1911 「踊の今と昔」『人類学雑誌』27-1~5。『柳田国男全集』24、筑摩書房、1999 年所収。

1917a 「六十余日の旅を了へて」『東京日日新聞』。『柳田国男全集』25、筑摩書房、2000 年所収。

1917b 「支那視察談」『時の扉 Vol. 2 特集 柳田国男講演筆録『支那視察談』翻刻・注釈・考察』東京学芸大学古典文学第四研究室、pp. 4-13、1998 年。

1917c 「五万の苦力が英仏へ」『東京朝日新聞』。『柳田国男全集』25、筑摩書房、2000 年所収。

1918 「南支那の苦力」『帝国農会報』7-7。『柳田国男全集』25、筑摩書房、2000 年所収。

1927 「サン・セバスチャン」『随筆』2-2。『柳田国男全集』10、筑摩書房、1998 年所収。

1958 「故郷七十年」『神戸新聞』連載。『故郷七十年』神戸新聞総合出版センター、1989 年。

1964 『定本柳田国男』別巻 4、筑摩書房。

柳田国男研究会編

1988a 『柳田国男伝』三一書房。

1988b 『柳田国男伝 別冊』（年譜）、三一書房。